

第 1 回白浜地域づくりを考える会概要

開催日	平成 21 年 7 月 9 日			開催場所	南房総市白浜支所 2 階会議室
参加人数	21 人	開催回数	1	開催時間	午後 1 時 30 分 ～ 午後 4 時 50 分

1. 開催内容

1. 開 会
2. 発起人代表あいさつ（行政連絡員会長 平野好生）
3. 自己紹介
4. 市民協働による地域づくり（千葉工業大学 鎌田元弘教授）
5. 地域づくり協議会の概要説明（市民協働推進室 座間主査）
6. ワークショップ（地域の課題と宝）
A～Dの4班で実施 A班、C班→地域資源マップ B班、D班→地域課題マップを作成
7. その他
8. 閉 会

2. 要旨

【4. 市民協働による地域づくり（千葉工業大学 鎌田元弘教授）】

●地域課題の解決について

行政の縮小に伴い、カネもヒトも縮小していく。サービスも縮小するのか。考え方の転換で、自分達ができる部分は、自分達で解決しよう。また、自分達でなければ解らない部分については、自分達で発想しよう。逆に今は、市民の目線を生かすチャンスである。

カネがなければ始まらない、ではなく、不足部分は、地域の知恵と汗で補っていくというのが基本的な方向。楽しくなければいけない。やらされ感があつては、長続きしない。行政がやってくれるではなく、自分達が関わって変わっていくことが見えることが重要である。

●我孫子市の提案型公共サービス民営化制度（全国初）

行政の効率化と質の高いサービスを同時に実現。市の全事業を洗い出し、公表し、企業・NPOなどから委託・民営化の提案を募集。市が担うよりも、民間の提案の方が効率的で、質も向上すると判断された場合、例外なく委託あるいは民営化へ移行。あらゆる業務について、民間進出の可能性を開いた。この事業の導入においては、市民力や、NPOの力も不可欠だが、なによりも職員の意識改革役所の制度改革が必要であった。

我孫子市の場合は、都市型の協働の先進事例だが、南房総市は、地域のそれぞれの色（特色）を生かした農村型の協働の全国的なモデルケースになれるのと考えている。

●英国の地域戦略パートナーシップ

国の構造改革に伴い、勝ち組、負け組が生じてくる。変革により、弱体化する地域が、発生する。そういった地域で政府や、企業、ボランティアなどの各セクターが、パートナーシップにより、連携しながら、地域全体の活力を上げていく仕組み。

●英国ウェールズコミュニティ・ファースト事業

①衰退コミュニティの再生と社会統合を目指して 2001 年より実施。年間 6 億円の事業

②衰退した地域を選び出し、地域格差を是正（小・中学校区程度）

③目的

- ・雇用に向けた教育と技能訓練、雇用創出
- ・住宅、生活環境の向上
- ・健康と福祉のためのライフスタイル形成

南房総市と比較しても、コミュニティがはるかに弱体化している。100以上の指標により地域の衰退度を地図に落とし、隠すのではなく、オープンにしていく。そういった中で衰退度が特に進んでいる10箇所程度を選び事業を展開する。（選択と集中）

地域コーディネーターによる事業の展開や、市民による地域のプロジェクトの採択等を行っている。

●グラウンドワークのパートナーシップ

コミュニティ・ファースト事業に似ているが、こちらはそれぞれの分野に専門家を置く。

グラウンドワークとは、英国内の地域社会の衰退を背景に、環境省によって設立された組織であり、「住民・企業・行政がパートナーシップを組み、地域環境の改善を通して経済および社会の再生を図り、持続可能な地域社会を構築すること」を目的としている。この目的をもとに、各地域に実働団体（グラウンドワーク・トラスト）が設立され、専門性を備えたスタッフと共に地域の再生と活性化に向けパートナーシップ型のプロジェクトを展開している。

・グラウンドワーク三島

特定非営利活動法人 グラウンドワーク三島は、日本で最初に英国のグラウンドワーク手法を導入して、富士山からの湧水が減少して環境悪化が進行した「水の都・三島」の水辺自然環境の再生と改善を目的として、市内8つの市民団体が中心となり、三島市や企業の協力のもと、事業をスタートし、NPO法人格を取得した。現在では20の市民団体が関わっている。現在までに、ゴミ捨て場化した川の再生、絶滅した水中花ミシマバイカモの復活、古井戸・水神さん・湧水池の再生、ホテルの里づくり等、市内30ヶ所以上で具体的な実践活動を展開して、パートナーシップの有益性を実証している。

・船橋市におけるグラウンドワーク導入事例

知的障害のある若者たちを中心に、地域の環境の再生創造活動を行っているNPOちばMDエコネットが、障害者の社会参加と耕作放棄地や荒地の改善を目的とした、コミュニティガーデン事業を実施。千葉工業大学建築学科鎌田研究室、行政、地元コミュニティ、企業の協力により、荒れた土地を農園にし、「友幸（ゆうこう）農園」とした。パートナーはお金だけの支援ではなく、企業等もそれぞれの専門的な分野で実際に参加し、パートナーシップを確立している。現在は、農園で栽培した食材で空き店舗を利用し、カフェを開設し、障害者の自立支援の場となっている。

●これからの日本の社会

行政が縮小していく中で、やっていける地域、やっていけない地域を分ける必要がある。衰退が進む地域は、隠すのではなく、地域でみんなの課題として集中的にそれぞれの専門分野での支援を行ない、地域活力を上げていく必要がある。

【5. 地域づくり協議会の概要説明（市民協働推進室 座間主査）】

【6. ワークショップ（地域の課題と宝）】

参加者をA～Dの4つの班に分け、A班、C班は地域の資源マップ、B班、D班は地域の課題マップの作成を行った。ファシリテーターは、未来塾のメンバーが行い、サポートとして千葉工大の学生が参加した。

各班の内容については、別紙のとおり

●今後の進め方

今回は、様々な意見を出してもらい、広がる方向で話しあいをした。次回は、ポイントを決めてアイデアを出し合う形にしていきたい。また、実際に現場で活動していく必要もある。グラウンドワークのキーワードは、右手にスコープ、左手に缶ビールである。汗をかきながら、作業をし、地域の課題が目に見えてよくなっていく。夜は、懇親を深めてまた新たなアイデアを出し合う。そのような取り組みを今後おこなっていききたい。

【7. その他】

事務局より

- ・名簿への住所、電話番号の掲載について
- ・開催日（曜日・時間等）の要望について

【8. 鎌田教授より宿題】

- ・白浜地域づくりを考える会のメンバーの中には、観光などの産業団体関係者、PTA、子供会などの者がいない。今後、地域からの認知などで障害となることが考えられる。については、白浜地域の団体が行っている事業などを一覧にしたものを用意願いたい。

⇒市民協働推進室で作成する。

白浜地域づくりを考えるワークショップの概要（A班）

開催日	平成 21 年 7 月 9 日			開催場所	南房総市白浜支所 2階会議室
参加人数	21 人	開催回数	1	開催時間	午後 3 時 00 分 ～ 午後 4 時 50 分
参加者	会員：篠崎 清高・高木 豊・柳 善夫・山口 惣司・行方 金次・野沢 稔（欠） 市役所職員：豊崎壽明 座間好雄 千葉工業大学：波見 渚				

1. テーマ 地域資源マップづくり

2. 作業内容

- 地図に目印となる建物（ご自宅など）の印をつける。
- 白浜地域の宝物（建物・場所・景色・名物・店・宿・行事・人・食・伝説・いい話など）について、内容を書いたラベルや写真を地図に貼り込む。ご自宅周辺から少しずつ広げていくとわかりやすい。
- 宝物の「新たな活用方法」「宝物をより光らせる方法」について話し合い、違う色のラベルに書き地図に貼り込む。

3. 作業内容の発表（高木豊）

地域資源（宝）と出されたのは、観光マップに載っているものばかりですが、その中で地図に載っていないものをピックアップして発表します。

- ・乙浜の港でお正月に投げられるみかん投げ
- ・乙浜の上のほうからの眺める景色
- ・酒まんじゅうは非常においしい
- ・その他は、下図を参照



この地域資源を活かす方法としては、

- ・嘘でもいいから物語を作ろう。
- ・周遊コースを作ってみよう。（海の道、里見の道など・・・）
- ・目的別のマップや時期別のカレンダーを作ってみよう。

・ 白浜にはプランターが余っている。プランターを活用して花いっぱいコースを作ってみては・・・
(鎌田教授コメント)

酒まんじゅうは、十分に資源になります。こういうものを控えめにしてはいけません。貴重な資源で物語になりやすい。A班の良かったところは、資源の使い方、目的別であるとか、季節別であるとか、物語を作るうえで、地図を十分活かしていく。今後は、市民協働で、行政とやっていく部分、観光協会とやっていく部分、JRさんとやっていく部分、他のNPOさんとやっていく部分という目的別もありますよね。今日の資源マップはスタートとして、色々目的別に分類していくと使えると思いますし、いい地図になっていきます。ありがとうございました。

(班員の感想)

(篠崎) 私は、白浜にきて間もないですけど、山側にいくと素晴らしい景色がある。そういうところを多くの人に見てもらいたい。

(山口) 地元の人間ではわからない(きずかない)ところいっぱいあるんだなーと思いました。感動しました。

(豊崎) 自身は頭が固いなあーと思います。今、見返してみるとまだまだ、資源はあるなーと思います。

(波見) 最初は緊張していたのか。時間がたつにつれて意見がたくさんでました。例えば、海女まつりのくじ引きとかいろんな資源がでてきました。また、地元の人が気づかないところを今日はみんなで共有できたと思います。

(柳) 仕事から、地域資源は人だと思っています。特に観光客です。

(座間) 資源の言われや歴史が以外に地域に人は知らない。その辺を磨けば光るのではないのでしょうか。

(行方) このようなワークショップは以前も行った事もある。これからどうやって進むかが大事だと思います。

(鎌田教授コメント)

地域の協働で資源を活用して、どういうコースに注目するとか、どういう目的に使っていくかなどプロジェクトを立ち上げる必要がある。今日は全般的に意見をだしましたが、まずは、白浜の目玉としてどこから手を付けていくか。次の段階で詰めていく。その時の協働の相手をどうするか、資金をどうするかを考えていく。これは今日でおわりではなく、これから深めていくものですので、今後もよろしくお願ひいたします。

白浜地域づくりを考える会ワークショップの概要（B班）

開催日	平成21年7月9日			開催場所	南房総市白浜支所 2階会議室
参加人数	21人	開催回数	1	開催時間	午後3時00分 ~ 午後4時50分
参加者	会員：佐藤香里・平野道雄・田所三明・宇山文枝・木曾修・井田真一・行方クニ子（欠） 市職員：吉田課長・平嶋太・平川顕 千葉工業大学：笹部				
<p>1. テーマ 地域課題マップづくり</p> <p>2. 作業内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地図に目印となる建物（ご自宅など）の印をつける。 ●地域の課題（建物・場所・景色など）について、内容を書いたラベルや写真を地図に貼りこむ。ご自宅周辺から少しずつ広げていくと分かりやすい。 ●地域課題の「改善方法（協働チーム・目標・効果）」について話し合い、主な内容を違う色のラベルに書き込み地図に貼りこむ。 ●優先的に解決すべき課題（目立ちやすく、多くの人を取り組みやすく、効果が目に見え、改善の達成感を感じられるもの）を複数選び、地図に印をつける。これに係わる組織や人が元気になれるようなものが良い。 <p>3. 作業内容の発表 （佐藤香里）</p> <p>テーマはチェンジ。 色々意見がでたが、みんな考えがポジティブ。 その中で2つを発表する。 1つがあるものを利用するという事。 観光客を呼ぶ、移住者を呼ぶ、その前に地域の中を整えることが必要。 空施設を利用して和田にあるくすの木のような施設を作ったり、作品の展示をおこなったりできるようなスペースに。 フローラルホールの有効活用や、再編後の長尾小の跡地利用等についても意見があった。 川や海や山など今あるものをきれいにしていくこと。美化。 情報交換をする場所がほしい。カフェのようなものが白浜にはあまりない。 受け入れる体制を整えて、それから自然、空いている畑を整備し、利用する。</p>					

(平野道雄)

今24人だが個々が次には1人でも多くつれてくる。

白浜には60代70代がいっぱいいる。草刈などかなわない。そういう人たちと連携して。

自然環境保護委員をやっている。山が荒れて川の流れが変わってきてしまっている。竹などが流れてしまうのはそういった影響がある。元を正さないとダメ。

山の中を歩く森林浴は誰でもできる。

(佐藤香里)

30代40代も地域に目を向けるべき。自分の子供に声かけを。

将来像が見えてくるのでは。



(鎌田教授コメント)

ネガティブでなくポジティブなのは良かった。

世代間のつながりが重要。地域の根本的な課題でもあるのでは。非常に重要。

(班員の感想)

・井田 真一

白浜に来て一週間だが山とか橋とかこんなにもおもしろいところがあるのだとは思わなかった。行ってみたいと分からないが、来た人に紹介できるようなパンフレットなどがあれば良いと思う。

・田所 三明

こういう会はどんどんやったほうが良いと思う。自分としては空いている土地・家を利用して活性化していきたい楽しみにしている。

・平野 道雄

先ほど話したので、次からの会は仕事もあるので、できれば土日でやってもらえれば100%出席できる。

・宇山 文枝

活発な意見が出て言いたいことも言えて満足度100%。ただ気になるのは観光に直接携わるひとの参加がなく、白浜が観光でいくのか、農業などでいくのか・・・その辺が不安になった。こういう会をたくさん重

ねていけばいいと思った。

・平嶋 太

市役所の不満が出るのではと思っていたが、みなさんポジティブで解決に持っていくまでどうすればいいかと話し合われたので良かったと思う。

・平川 顕

自分の地域でその地域を歩いていないなと感じた。自分の地域でこれだけの課題がでるか。

・吉田 勇

白浜は白い浜と言われているが、山から色々なものが流れてくる。月に一回海岸清掃をしている。もっと広がってくれば。下水なども整備して、きれいな白浜になればと思う。

・木曾 修

地元の人があまりいない。外から来た人が多い。前向きな目が必要では。行政が私たちといっしょに何をやってくれるのか。いままでもこんな会はあったが、やっただけで終わってしまった。これからを楽しみにして参加したい。

白浜地域づくりを考えるワークショップの概要（C班）

開催日	平成 21 年 7 月 9 日			開催場所	南房総市白浜支所 2階会議室
参加人数	21 人	開催回数	1	開催時間	午後 3 時 00 分 ～ 午後 4 時 50 分
参加者	会員：栗原 猛・小谷 孝・中村 哲也・鈴木 重和・田代 宏子（欠）・鳥海 悦司（欠） 市役所職員：山口 幸弘・三嶋 明夫・杉田 修一 千葉工業大学：柳堀 千春				

1. テーマ 地域資源マップづくり

2. 作業内容

- 地図に目印となる建物（ご自宅など）の印をつける。
- 白浜地域の宝物（建物・場所・景色・名物・店・宿・行事・人・食・伝説・いい話など）について、内容を書いたラベルや写真を地図に貼り込む。ご自宅周辺から少しずつ広げていくとわかりやすい。
- 宝物の「新たな活用方法」について話し合い、物語性のあるところに緑色の印をつけ、ラベルに書き込む。

3. 作業内容の発表（中村 哲也）

地図内の赤まるが、メンバーの家。地域資源（宝）と出されたのはA班と重複が多い。フラワーパーク、小説「己が罪」の舞台であるかぶと岩、石船弁天、道祖神、若山牧水の碑、下立松原神社、温泉、めがね橋、さざえ、あわびの一大産地、入定窟、磯笛公園、花畑、里見義実の墓（杖珠院）、城山登山道などをピックアップした。共通しているところは、歴史、風土に着目してあげられたもの。私個人の見方としては、地域の気候、住んでいる人たち、産物など、様々なテーマがある。時間の関係であげられていないが、別の場面でどんどん出てくると思う。

これら地域特性を生かすには、どうしたらいいか、観光につながるか、どのように展開するか、話し合った。結果、物語性を多少創作も含めて作り、PRしていければという共通意見であった。

- ・ その他は、下図を参照



(鎌田教授コメント)

ストーリーを、多少創作があってもいいじゃないかというのは、大変重要なことと思う。

今回のワークショップが「これで全て、終わり。」ではなく、日常から、「これは紙面になりそうだ。この人は使えそうだ。この場所は、こう改善したらいい。」というものを持って来ていただき、常に何かの会議の時に持ち寄って新たなものを築いていく。こうしたグループワークは、「役所が仕掛けるから。」というのではなく、単なるきっかけにすぎない。これからは、このメンバーの中でエンジンが回っていく。「これを目指していく。」と、常に意識を持っていただくということが大変重要です。

(班員の感想)

(小谷) 根本地区を担当しました。コメントのみ用意していたが、目に見える方が良いと、昨日、車で回れる範囲で写真を撮った。A班とC班で1枚にまとめる作業もいい。

(柳堀) マップ上の緑のシールは、物語のあるところ。この点どうしを結んで回りながら、観光につなげていく。皆さん地域地域で、その知識を持っており、こうした人に観光大使になっていただき、観光に入って、活用されたい。

(栗原) 海が好きで、常々磯笛公園前面が、海水浴場になりえると考えている。これを機会に何とか浄化していきたい。白浜の気風は、働き者で、ボランティアは、暇人だからできるということで、抵抗がある。働き者ゆえ入りきれないことは、悪いところでもあり、これからの課題。

(中村) 私は、むしろ白浜の人の気風が非常に好きです。白浜に15年住んで、ますますその感を深めている。白浜と名前のつく所は、全国皆海洋性民族で、解放的。これは、白浜の財産であると感じている。

(三嶋) 青木地区に住んでいるが、私の知らないところが海にも山にもまだまだたくさんある。こうした地域資源、良いところがいっぱいあることを発信して観光、定住につながるよう進められたら。

(山口) 白浜に住んで30年、だいたいことは把握しているが、グループで、この物語を知っているかと聞かれて、知らないところもあった。今後は、昔話を勉強していきたい。

(杉田) 地域資源を生かそうという意識を強く感じた。今まで、行政としてそういった声を直接感じえることはなかった。この思いが地域づくり協議会で実現できたらいい。働き者という気質は、公民館でも感じるところで、教室を開催しても、特に若い女性の参加が少ない。引っ張り出せないだろうか。

(鈴木) 今回は、白浜14区の中で、出ていない区もある。次回は、皆に声をかけて、商工会、観光協会についても同様、議員にも声をかけ、理解を深めてもらい、14区の人が出揃う形を期待します。

(鎌田教授コメント) 白浜の人たちの気質の話が出ました。働き者、オープンだということ。市民協働とは、一緒に働くを書く。必ずしもボランティアという訳ではなく、「地域で生きていくために、地域の生活をよりよくするために。」を目的に、オープンさを生かして、「皆さんの力が必要です。一緒に働きましょう。」ということをうまく引き出せていければいい展開になると思う。

白浜地域づくりを考える会ワークショップの概要（D班）

開催日	平成 21 年 7 月 9 日			開催場所	南房総市白浜支所 2階会議室
参加人数	21 人	開催回数	1	開催時間	午後 3 時 00 分 ～ 午後 4 時 50 分
参加者	会員：嶋田 由美子、小谷 繁、平野 好生、小谷 三枝子、樋口 英明、落合 とも子 （小谷さんは、ワークショップのみ、発表時には仕事のため退席） 市役所職員：野中 祐介、結縄 宜隆 千葉工業大学：関貫				

1. テーマ 地域資源マップづくり

2. 作業内容

- 地図に目印となる建物（ご自宅など）の印をつける。
 - 地域の課題（建物・場所・景色など）について内容を書いたラベルや写真を地図に貼り込む。
- ※今回のワークショップでは、ここまでで時間切れとなってしまった。以下は、当初の予定表にあった作業内容。
- 地域の課題の「改善方法（協働チーム・目標・効果）」について話し合い、主な内容を違う色のラベルに書き込む。
 - 優先的に解決すべき課題（目立ちやすく、多くの人に取り組みやすく、効果が目に見え、達成感を感じられるもの）を複数選び、地図に印をつける。
 - 各班の成果とマップづくりを通じて感じたことを発表し、感想を述べ合う。
 - 協働で地域課題（優先度の高い課題）を解決するためのプロジェクトを立ち上げ、実行計画を作成する。

3. 作業内容の発表（嶋田 由美子）



- ・課題を出すのに一生懸命になってしまい、解決方法までは話し合うことができなかった。
- ・私もいろいろなところで、こういったワークショップをしたが、仕事がない、海岸のゴミ、放棄耕作地が増えている、歩道がないなどは、ワークショップのメンバーが変わっても出てくる課題と感じられた。
- ・班の中でも、言い争いのようになってしまった件がある。漂着ゴミの関係で、今年になって移住してきた方が、漂着ゴミを拾っているということで、房日新聞に紹介された。その方は、地域の人に声をかけて、いっしょにゴミ拾いをするメンバーを集めたいという話しをしていたことを発表された方がいて、それに対して、本日のワークショップのメンバーにその地域に住んでいる方がいて、「移住してきてゴミ拾いをしている方は、平日やっているかもしれないが、地域では、土日にゴミ拾いをしている、房日新聞に出てしまったことで、地域が何もしていないと言われるのに疑問を感じる」という意見がありました。それで感じたことは、こんなに狭い地域なのに、地域内にコミュニケーションがとれていないということ。コミュニケーションが足りないということにここで気づかなければならないのではないかな。
- ・私も、まちづくりの会議にいろいろ出ているが、今までは、役所が報告書をつくって終わりという形が多い、そこで、私たち住民が考えていかなければならないのは、それでいいのかということ。役所の人が終わりと感じて、その問題を住民が引き継いでいくということを学んでいかないといけない。やはり、住民がいかに話しあって、解決する力を身に付けていかなければならないと今日感じました。

(鎌田教授コメント)

- ・班の状況から、小さい地域の中でのコミュニケーションと、住民自らがワークショップの出口を考えていかないといけないという、2つの大きな地域課題を指摘いただきました。
- ・狭い地域だからこそ、遠慮がちになってしまい、伝わらない。情報の共有は難しい、そういった部分を捉えて皆さんといっしょに、地域課題を考えていきたい。

(班員の感想)

(落合) おもてだつては悪いことを言わない人が多い。こういうワークショップをいろいろな地区でやっているといい。

(平野) フローラルホールの活用について考えていきたい。いい施設なのに眠っている。これからの「道の駅」を考え朝市のようにお金をかけないように、フローラルホールを宝と考え、文化の発信基地にしてほしい。

(樋口) 白浜は、母ちゃんもっていると言われている。こういった会議に母ちゃんも出てきてほしい。

(関貫) ワークショップは、とても楽しいものなので、これからも積極的に会議に参加してほしい。

(結縄) 法律改正のようなとても大きな課題から、いろいろな課題が出ました。中にはポジティブな課題もあったので、そういった課題を皆さんと一緒に解決できるよう、進めていきたい。

(野中) 積極的に解決していくための芽もあった。みなさんと話しを重ねていくことで、大きな課題も解決策を見出していくことができるのではないかと感じた。

(鎌田教授コメント)

- ・この班は、地域のコミュニケーションの話しのように本質的な部分をお話しいただいた。地域には2つの目線があるということを示していただけた。

- ・対立は悪いことではないので、違う見方も恐れずに書いてほしい。それが議論の広がりになると思う。

第2回白浜地域づくりを考える会概要

開催日	平成 21 年 8 月 5 日			開催場所	南房総市白浜支所 2階会議室
参加人数	34 人	開催回数	2	開催時間	午前 9 時 00 分 ～ 午前 11 時 50 分

1. 開催内容

1. 開 会
2. 西横渚地域コミュニティについて 他（市民協働推進室 山口室長）
3. 市民協働による地域づくり「市民協働と結いの違いは。」（千葉工業大学 鎌田元弘教授）
4. 前回のワークショップの復習（千葉工業大学院生 辻田）
5. ワークショップの進め方について（千葉工業大学 鎌田元弘教授）
6. ワークショップ（A～Dの4班で実施 A班、C班（地域資源班）は、弱みと強みのゲーム
B班、D班（地域課題班）は、ブレインストーミングとKJ法）
7. まとめ
8. 閉 会

2. 要旨

【2. 西横渚地域コミュニティについて（市民協働推進室 山口室長）】

白浜町内でも地域によって違いがあると思うが、私の住んでいる西横渚のコミュニティについて、紹介する。組織としては、組があり、その土地の小字名で名称が付けられている。6組、各組12～30軒で組織。全体で80世帯で区を構成。白浜町内では小さい方。役員構成は、区長は、総会で決定し、任期は、1年で終わることはなく、2年から長い人で8年程度。その下に区長代理がいる。ほか会計（区費、補助金の管理）、土木委員（普請、草刈等の世話）、組長6名が区長を助け、区全体の組織として動いている。

共同作業について、各組単位ではない。しかし、隣近所のふれあいとして、講仲間で、毎月一日講、十六日講という集会がある。また、地域の仏像や掛け軸を持ち寄る“御カネ様”など月に2、3回各家持ち回りで場所を提供し、お盆には、講仲間でまわり念仏を行い、コミュニティを形成している。

区としての共同作業では、集会所の清掃、入定様「西春」の祭礼（3月）、普請（随時）。滝口地区（4区）の単位では、大堰水路の清掃、下立松原神社清掃、神社祭礼（8月）。旧町単位では、ゴミゼロ（5月）、海岸清掃（夏・秋）を行っている。

【南房総市内の協働事例（山口室長）】

ふれあい喫茶「なごみ」は、和田地域福祉センターに来る高齢者の憩いの場。市では、高齢者の健康増進、なごみの会では、憩いの場を提供したいという想いがあり、双方話し合いにより、市は、スペースの提供や保健師の健康相談、なごみの会は、お茶のサービスという1つの形が実現した。

富楽里竹燈祭りは、未来塾と移住者、企業（富楽里）、市がそれぞれの思いを持って話し合い、事業が実現した。このような形で協働が進めばということで紹介した。

【3. 市民協働による地域づくり（千葉工業大学 鎌田元弘教授）】

山口室長から、従来からのコミュニティ「結い」について、また、市民協働の事例の紹介があったが、私からお願いしたこと。理由は、外から南房総へ来た人が大勢いる。よそのいろいろな地域を見ている

ので、南房総を新鮮な目で見る。この方々にとって、従来からの習慣や組織は、知り得る機会がありません。ある行政区では、やり方に違いがあり、そういった認識もされることがないから。結いや講と市民協働の違いについて、補足したい。

従来から住んでいる人にとっては、今さらということもあるでしょうが、従来から住んでいる人と新しく住んだ人が同じスタートラインで進めるのが市民協働の原点ですので、お付き合いください。

協働とは、市民と行政（市民の中には大学や企業も入る。行政には、国県等も含まれる。）が、共通の目的の実現のために、地域の課題を自分たちで解決し、自分たちで活かす。自分たちの行政区だけの話ではなく、市全体の中で見て考えるのが、結いと少し違う。それには共通の目的をはっきりさせて一緒に向かう。そのためにワークショップなどを用い、一緒に話し合い、共通化するのが特徴。上意下達の関係ではない。できることは自分です。できないことは、できる人・地域・行政区が補い合う。それでもできないことは、行政が行う。『身近なところで、できることからやること』がキーワード。やりながら考え、そこから反省し、新しいことをスタートするのが重要。やる前から批判する、いがみ合うのでは、スタートはない。それは、結いも同様。

結いは、特に、新しく来られた方、若い方には馴染みがないかも知れない。結いとは、農村社会の共同労働のならわしで、集団的農作業を一緒にやってみましょう、からスタートした。伝統的な結いが拡大し、屋根葺きや共有林管理など、互いに労力を貸し借りする観念。地域によっては、貸し借りの観念の強弱により、「結い」あるいは「もやい」という言い方をすることもある。

結いへの期待と課題は、人と人とのつながりが共同の意識に高まるという意味では、期待するところであるが、課題としては、こんにち、行政区ごとのコミュニティで、課題解決が済むかというところではない。共同の意識で仲間内で固まってしまおうという状況になりうる。特に少子高齢化で、特定の年齢、性別、職業、地域の性格などで、グループに偏りが生じる。行政とのつながりが弱いため、立ち行かなくなると行政依存となる。本質的な課題は、仲間内での結束が高まりすぎて他の考えが受け入れづらくなってしまふこと。これらは、全国的な傾向である。しかし、結いの良さもあり、そのハードルを乗り越えることが必要。有名な事例として、白川郷の屋根葺きは、結いでやっている。変化してきているのは、昔からの結い返しという観念があるが、その返しがなかなか支えきれなくなっている。最近では、地域だけでは賄いきれなくなり、地域全体の人々のボランティアを始めており、結いよりは、市民協働。結いのパワーが無くなった時に、市民協働でどうすくいとるか、という観点もある。

結いは、伝統的な住民の深い結びつき。市民協働は、結びつきは緩いが、市民（南房総の他の地域、他県からの協力者等を含む）と行政等との広いつながりや、いろいろな組み合わせがある。結いを市民協働にどう発展させられるか。逆に市民協働は薄っぺらい部分があり、新たな結いとして、新しい連携のあり方を組み上げられるか。両方が両方から学ぶことが一番大事。今回のこうしたワークショップもある意味「結い」「講」です。一緒に考え作業しながら共有する。一緒に汗を流しながら作業をする。普通の会議とは違うことを理解していただきたい。

前回、「地域資源について」、「地域課題について」話し合ったグループがあるが、これを市民協働事業として詰めていく。どう活用するか、ストーリーにしていく等の話があった。例えばコース・テーマ・食などをつないでいく。但し、今ある資源をそのまま使えるものとは限らず、磨く必要がある。弱みと強みのゲームをしながらワークショップを。

地域課題のグループでは、「結い」と「協働」で意見対立があった。それは対立ではなく、それぞれの良さがあり、出発点としてどちらがふさわしいか。今回は、特に市民協働を進めるうえで、海岸ゴミ

の問題、転入者の情報共有などがテーマとなり得る。市民協働でできそうなことを話し合ってもらえば。

【4. 前回のワークショップの復習（千葉工業大学院生 辻田）】

A～D班に分かれて地域課題マップ、地域資源マップを作成した。各班の成果を発表。

A班 地域資源マップ マップに参加者の住んでいるところ、キンセンカマップ、観光地を落とし、住民が知っている資源、行事、見える資源、隠れた資源、観光マップを超えた地域資源マップを作成し、その資源を光らせる方法として、ストーリー性のある道づくりや、ガイドの育成などが検討された。

B班 地域課題マップ 課題として施設、観光、自然に関することなどを挙げ、優先順位をつけて整理。特に、公共施設の再利用、自然改善（海岸ごみ）が上位の課題として挙げられた。

C班 地域資源マップ 白地図に民話を中心に落とし込み。写真を持ち寄り、視覚的に見えるマップを作成。物語を作ってPRしようという結論に至った。

D班 地域課題マップ 行政ができること、地域住民で取り組めることを分けながらまとめたところが特徴的。

【5. ワークショップの進め方について（鎌田教授）】

これを受けて、特に地域課題班は、ブレインストーミングとKJ法により進めてください。ブレインストーミングで一番大事なことは、自由な意見を出し合い、討論する過程で、連鎖的にアイデアを引き出す。ルールは、意見に対する批判の禁止。芽を潰さない。人の話を聞くこと。リラックスした自由闊達な話し合いの中で、結論を出すよりも、より多くのアイデアや着想を出し合うことが大事。

KJ法は、準備としては、模造紙、ポストイット、ペンなど身近なもの。まず、ブレインストーミングで出された意見やアイデアを1枚ずつラベルに書き込み、模造紙に広げ、同じようなもの同士を集めてグループ化する。ラベル隅には、自分のイニシャルを書くこと。1つのラベルに1個のことを書くことは、後でいろいろなアイデアを組み合わせる必要があるから。グループ分けして1枚だけになってもOK。1枚はとともユニークなアイデアで宝物かも知れない。そしてグループに違う色ラベルで表札を作る。さらに表札の中をもう一度ばらしたり、表札と表札との関係を結んだりして図解となるようにする。最後に、全体のタイトル、参加者名、日付けを記し、本日、このメンバーで、このようなアイデアが出されたというのが、KJ法です。まずは、ブレインストーミングで自由闊達に話し合ってから、KJ法に入ってください。

地域資源班は、弱みと強みゲームを行います。模造紙に、地域資源の「弱み」「強み」「弱みでもあり強みでもあるもの」をラベルに書いて出し合う。その中で、「今すぐできること」「これから検討すること」という組み合わせに分ける。また、違う方法として、「弱みを強みに変えるにはどうしたらいいか」「強みをさらに伸ばすにはどうしたらいいか」、アイデアを出して考えていただきます。

こういうワークショップの手法を覚えて、使っていただくのが一番良い。ファシリテーター（司会者）になっていただくことが一番勉強になる。

開始するに当たり、ここに、参考例の資料があるので、もしも意見が出にくい場合は使っていただきたい。地域資源班については、対象の抽出として、①景観整備とストーリーづくり、②地域資源を活かした定住の条件、③地域資源を活かす情報発信という例。

地域課題班は、①市民協働による漂着ごみ問題の解決、②定住のための課題解決、③居場所づくりと情報共有という例。

【6. ワークショップ（A～D班）】

前回の班編成（A～Dの4つの班）で、地域資源班（A班、C班）は、『弱みと強みのゲーム』、地域課題班（B班、D班）は、『ブレーンストーミングとKJ法』の手法を用い、前回の成果を踏まえたテーマ設定をして、ワークショップを実施した。なお、鎌田教授から、テーマ設定のヒントとなる具体例が提示された。ファシリテーターは、未来塾のメンバーが行い、サポートとして千葉工大の学生が参加した。

各班の内容については、別紙のとおり

【7. まとめ（鎌田教授）】

各班でテーマを絞り話し合いをしていただいた。体験した中でわかると思うが、テーマというのは、発展するもの。拡散するもの。テーマを絞り込むことがいかに大事か共有できた。各班の寸評。

A班 出だしは好調、情報発信全般の議論で高まり、具体的な議論に入ると、テーマが非常に大きく、強み・弱みでは、整理できず、煮詰まり焦げついた。今回の結果は、失敗とは言わない。テーマをどう切り取るか、今後の糧にするという点においては、A班の役割は非常に大きい。

C班 地域のPRから始め、伝達方法についての議論になり、地域の有線放送の廃止という問題に話がおよび、この弱みをどう克服するか、話の中で、回覧板など地域固有の伝達方法（宝）があることに気づき、もう一度弱み・強みが生きてきた。A班と同じ地域発信というテーマから、抽象的なことになりそうな危機感があつたが、より具体的な、地域ならではの絞り込みによってまとめられた。具体的なテーマの切り取り方が大事。

B班 漂着ごみからリサイクルに絞って議論が流れて行き、行動目標まで達成できた。

D班 多くの課題が互いに主張するため、課題決めに困難を要したが、最終的にごみ問題に入り、教育やコミュニティの問題と関係するという気づきがあり、全体がまとまった。

このように、失敗と成功を繰り返すが、テーマを決めた中で、手法を入れ込む。地域課題から入っても地域資源につながる。またその逆のケースもある。どんどん経験を重ねて、1個のテーマであっても、多くの協働事業が展開していくのが一番の成果。

最後に、ワークショップの達人になるための注意事項について

- ①言い放しで手が動かない。大切な情報がかたちに残らない。⇒口と同時に手を動かしましょう！
 - ②テーマが発散していく。テーマが偏っていく。⇒具体的なテーマに再び設定しなおしましょう！
 - ③おひとりの話す時間が長く演説になってしまう。⇒ポイントを絞って短く話しましょう！
 - ④お隣同士の話になってしまい、全体に集中していない。⇒ひとりが話したらしっかり聞きましょう！
- 次回の内容は、各班の発表等、事務局と詰めさせていただく。